

1. はじめに

昨年(2020年)はトビイロウンカ(図1)が県内の水田で多発し、吸汁による坪枯れ被害も発生した。ここでは、本虫の生態と昨年の発生状況、防除上の注意事項について紹介する。



図1 トビイロウンカ成虫
左：長翅型（飛翔して移住する）
右：短翅型（飛翔できず、増殖率が高い）

2. 生態と昨年の発生状況

トビイロウンカは、梅雨時期(6~7月)の下層ジェット気流(梅雨前線の南側に沿って発達する高度1,500m付近の風)に乗って、中国大陸から飛来する。2020年、県内3地点の予察灯による6~7月の誘殺数は、過去10年の同時期と比べて最多で、飛来数が非常に多いと考えられた。さらに、夏季の気象は高温少雨傾向であり、増殖を助長する条件であった。

その後、本虫の発生ほ場率と25株あたり虫数は、8月に県北部65%・2.5頭(平成：10%・0.4頭)、県中部100%・15.0頭(平成：17%・1.5頭)となり、9月上旬には県北部88%・90.9頭(平成：14%・3.0頭)、県中部100%・15.6頭(平成：

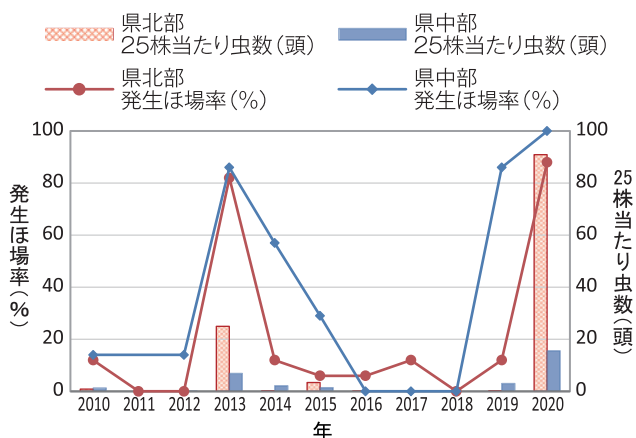


図2 トビイロウンカ発生状況の経年変化(県北部・県中部) 9月上旬、ほ場における払い落とし調査(調査ほ場数：県北部17、県中部7)



図3 トビイロウンカによる坪枯れ被害(2020年9月8日、県北部)

29%・1.7頭)と過去10年の同時期と比べて最多となった(図2)。

多くの発生ほ場では、追加の薬剤散布が行われたが、各地で坪枯れ被害が発生した(図3)。

トビイロウンカは、栽培イネが唯一の寄主植物であることから、稲刈りの後はほとんど増殖できない状態になる。また、休眠することもないので、日本では越冬できずに死滅する。

3. 防除上の注意事項

トビイロウンカの発生量は地域間やほ場間で大きな差があり、同一ほ場内でも発生が偏り、局所的に多発する。また、増殖率が高いため、当初低密度でも8~9月頃には高密度となって坪枯れ被害を起こす恐れがある。定期的に観察し、1株あたり5頭以上の成・幼虫を確認したら、早急に防除する。

本虫は、イミダクロプリド剤、チアメトキサム剤、クロチアニジン剤に対する感受性低下が確認されている。主な商品名はそれぞれ、アドマイヤー、アクタラ、ダントツだが、混合剤等では名称が異なる場合もあり、薬剤の選定時には注意する。水和剤等の場合、生息場所である株元に薬剤が十分到達するように散布することが重要である。出穂後は特に到達しにくくなるので、出穂前の粒剤散布による予防も検討する。

4. おわりに

トビイロウンカは毎年新たに飛来して増殖するため、栽培初期には発生量を予測出来ない。発生予察情報(https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouho_u_d/fil/2021suitouyosatsutou.pdf)等で状況を確認するとともにほ場をよく観察して早期防除を心がける。

(環境部 衛藤夏葉)